

2025年3月号

故郷の人物を知ろう

あ ん こ ち しん
たかおか 温故知新

先覚的な銅器問屋／金森宗七(1821~92)

宗七の幼名は^{みのきち}巳之吉、金屋町の刃物商七郎右衛門の二男として生まれました。24歳で独立し、御馬出町に銅器問屋「金宗」を構えます。原料の銅を仕入れ、職人に仏具や火鉢を作らせ、仙台・秋田から下関、大坂など全国に販路を開拓し、大いに成果を得ました。しかし、売れた原因は単に他の地域より値段が安いただけだと考えた宗七は、自ら筆をとって図案を研究し、高岡銅器の品質向上に努めました。1865年には横浜の居留地貿易に進出し、当時流行したジャポニズムも追い風に国内外へ広く販売しました。

1872年、自宅裏に工場を建設し、更に前年に廃藩となった旧富山藩の刀剣金具の名工^{ひらいわしんすい}平石親隨らを招いて職人を養成し、さらに彫金の名工^{やざえもん}横山弥左衛門や家畝の名手^{せきざわついち}関沢卯市らに斬新な意匠の製品を発注して逸品を

多く制作します。「岡物」と揶揄された高岡銅器は一転して全国で評判となりました。宗七の名声を慕って集まった旧加賀藩の名工^{むらさわ}(^{くへのり}村沢国則、^{こまいもとさだいずみ}駒井元貞、^{せいじ}泉清次(鏡花父)ら)を雇用して高級品を制作したので、高岡銅器の美術工芸技術が大きく進歩しました。

1873年、ウィーン万博に出品・受賞(これ以降も国内外の博覧会にて受賞を重ねます)。同年、金沢彦三町に職人31名を抱える「宗金堂」を出店します。これは高岡銅器問屋として初の元藩都への進出という快挙でした。しかし、翌年以降金沢商人・長谷川準也に次々に引き抜かれ、1875~76年頃に撤退せざるを得ませんでした。その後も高岡で活躍し、銅器産業の発展に多大な貢献を果たしました。
(仁ヶ竹主幹) 問合先 博物館 図20-1572

金森宗七受賞 ウィーン万博進歩賞証状
(1873年) 博物館蔵

